

## 「戦争責任の継承」

2020年08月17日

「東京新聞」の8月12日の朝刊に、元英国陸軍兵の100歳になるレン・ギブソン氏の日本軍による泰緬鉄道建設に捕虜として強制労働をさせられた過酷な実態が、遺言として掲載された。泰緬鉄道は、映画『戦場にかける橋』で有名となった。タイからビルマ（現ミャンマー）まで、415 kmの鉄道を敷く工事で、英、豪、オランダ軍の捕虜62,000人が従事し、過酷な労働と疫病と栄養失調で12,400人が死亡し、アジア人労働者も6万~8万人が犠牲になった。数字で著せば、数文字だが、一人ひとりには家族があり、友人がいた。一人の命の喪失には、多くの人の悲しみが覆っている。ギブソン氏は下記のように語っている。裸足で、ふんどし一枚で泰緬鉄道を敷いた。木や竹を伐採し、土手を造り、灼熱の鉄板を運んだ。固い岩盤につるはしで穴を開け、火薬を入れる。「日本兵は私たちが離れる前に爆破するので、体中にがれきが降り注いだ。」マラリアで高熱が出て休めず、水を飲めば殴られた。サソリに刺されて死線をさまよひ、多くの戦友を失った。「湿地帯では歩くだけでヒルが脚をはい上がった。日本兵の車が泥にはまると、夜中でも起こされ、漆黒の闇の中、泥をかぶりながら車を押した。」「テンコ」「バンゴ」「ヤスメ」の日本兵の絶叫が耳にこびり付いている。飢えと暴力と病が支配し、奴隷のような日々であった。親友のウィルフは、脚が熱帯性潰瘍にむしばまれ、日に日に肉が腐っていった。脚を切断したが、手遅れだった。小さな十字架を手に、「これを母さんに渡して」という言葉が最期の言葉だった。「東京新聞」は「編集後記」に、歴史を検証することが新聞の大切な使命であると書き、「百歳の元英国人捕虜が語る日本軍の加害の歴史です」と締めくくっている。

月刊誌『世界』の9月号は「戦争責任の継承」を特集し、5人の方がそれぞれの論考を寄稿している。95歳になる李鶴来氏が「不条理との長い闘い 朝鮮人BC級戦犯死刑者の無念に伝えてほしい」と題して、インタビューに応じている。李氏の言葉は、日本の戦争責任を負わない理不尽さを露わにしている。李氏は17歳の時、捕虜監視員に応募し、天皇への忠誠と精神訓話を受ける初年兵教育を受けて、ギブソン氏が苦しんだ泰緬鉄道建設の捕虜監視に当たった。朝鮮人、台湾人も、戦闘員ではなく、捕虜監視員として軍属に徴用された。捕虜の処遇を決めたジュネーブ条約を知らず、日本軍から教えられた通り、捕虜たちを暴力的に扱い、無慈悲に建設労働をさせた。李氏は1946年にBC級戦犯裁判で死刑判決を受け、後に減刑された。1956年に仮釈放されるが、サンフランシスコ平和条約発効により日本は独立し、朝鮮人たちは日本国籍を失った。それにもかかわらず、彼らの拘禁は日本政府により継続された。戦争裁判で死刑を宣告され、執行された人々が、書き遺した遺書を集めた『世紀の遺書』が出版されている。日本人の場合、死刑になる理由、例えば、日本の間違いを贖罪する死であるなど、理由を捜し得る。しかし、朝鮮人の場合、誰のために何のために死ななければならないのかを見出すことができず、心の整理ができないまま、死刑となる苦悩は計り知れない。読むに耐え難いもので、中でも、捕虜虐待で死刑にされた朝鮮人の遺書には胸をえぐられる。李氏が訴えたいことは、日本人には恩給や援護等の処遇をしているが、朝鮮人の場合、戦時中は日本人だと強調しながら、突然、日本国籍がないと、何の謝罪も補償もないことである。親友の幾人かは死刑になり、靖国神社に祀られている。刑死者の無念さに対し、日本政府が適正な処理をすることが道理ではないか。ドイツのメルケル首相はアウシュビッツを訪れ「終わらない責任」を強調した。「戦争責任の継承」を無視することはできない。それは、卑屈な自虐ではなく、人間であることの証しであり、次世代に平和を構築する手立てである。